

測は許されないなのでその防除対策は忘れぬようにしたいものである。

私共は若い学生の頃から一般に防除が困難で最後に残る病害はウイルス病と土壌病とであろうと聞かされて来た。今現実には多発し私共を悩ませている病害はまさに何十年か前にいわれた通りである。ウイルス病はその伝染経路が判明し忠実に防除対策を講ずると被害の減少するものがあるが、土壌病は伝染方法が分ってもその防除が困難でお手上げのことが多い。今後ともこれら病害に対してのはげしい闘争が展開されることと思われる。

また諸外国に多発し甚大な被害を及ぼしている病虫害でわが国にまだ発生していないものはいくつかある。これら病虫害の侵入に対しては世界に冠たりといえるわが国の防疫体制によって上陸が阻止されているが誠に幸なことである。しかしこれらわが国に未発生の馬鈴しょに甚大な被害を与える病害虫は虎視

眈々としてわが国への侵入をねらっている。

これら病虫害の中で最近アジア地区に発生が見られているといわれるものがあり、今後益々監視の手をゆるめてはいけないと思う。

馬鈴しょ原原種農場（種苗管理センター）と私との連がりにはほぼ40年になんなんとしている。その間、仕事においても人との連がりにおいても固いきずなが出来、ほとんど私の研究生生活の大半と関連性がある。今過ぎ去った長い年月を振り返ると万感胸に迫るものがある。

今は世界のどの国にもひけをとらないすぐれたわが国の馬鈴しょの採種技術をみる時、長い間労苦を共にした各農場の人々の努力がしみじみと胸にしるされる次第である。農場の今後の発展を祈って止まない。

〈略歴〉村山大記 1935年・北海道大学農学部卒業
1958年・北海道大学農学部教授（ウイルス学） 1974年・同大学退官、名誉教授・台湾中興大学教授 1975年・北海道澱粉工業協会参与（常勤）現在に至る。

閑談雑談

タコとふかしイモ

「イモ・タコ・ナンキン」といえば女性の好物だが、そのタコもイモ好きだったとは知らなかった。

劇画、『男組』や『美味しんぼ』の原作者として知られる雁屋哲氏のエッセイ、『美味しんぼの食卓』（昭和62年、角川書店）にそれがある。同氏は三浦半島に住んでいるが、その相模湾側ではタコがよく釣れるという。「おお、汝醜悪にして美味なるものよ」というところに、その仕掛けがある。

「道具も簡単だ。舟形の木の板（かまぼこの板より少し大きめの寸法）に大きな鉤（かぎ）を2本とりつけた仕掛けは大抵の釣道具屋

で手に入る。その板にたこを誘う餌をくくりつけてやる。いかや鯖（さば）や、なかには柔らかい合成樹脂でできた蟹（かに）をくくりつける人もいる。ふかしたさつまいもでもよいというのだから、たこもいいかげんなものだ」

あとはこの仕掛けに糸を付けて、海に放り込むだけでいい。

じっと待っていれば、タコがしがみついてくる。板には鉤があるが、それがタコの体に刺さっていることはほとんどないという。だから危くなったら板を離せばいいのに、それができない。

ふかしイモにしがみついたまま、海の底から上ってくるタコ——かわいそうだが、どこかほほえましくもなってくる。

（井上 浩）